

# 「多文化共生」について

氏名： 松居 勇

学校名： 大阪府立大学

担当： 大学ボランティアセンターのコーディネーター 学生有志に対するプログラムとして実施

時間数： 1 時間

対象学年： 大学生

人数： 6 名

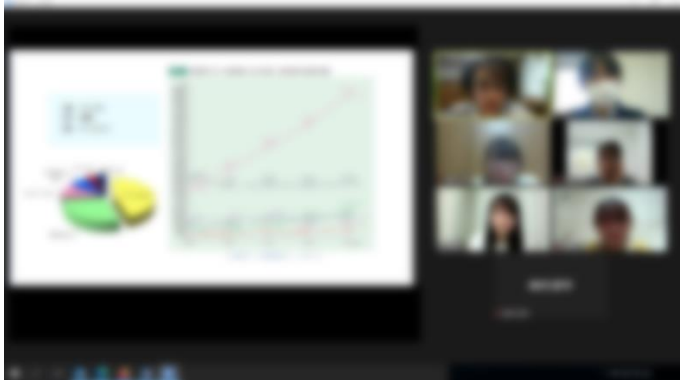
## 【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：		
「世界とつながろう」という（よく語られる）ニュアンスについて、海外に目を向けるばかりではなく、自分たちの身の回りで暮らす、多様な文化的背景をもつ人たちの存在も意識すること。その人たちが心地よく日本社会で生活するためには何が必要なのかを慮ること。		
【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	日本社会で暮らす多様な文化的背景をもつ人たちに対する理解
	（イ）思考・判断・表現	多文化共生社会を実現するために何が必要なのかを慮る力
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	日常生活の中で取り組めるアクションを生み出そうとする姿勢
【3】 単元設定の理由	<p>大学生にとっての「国際経験（国際的視野を身に付けること）」について、これまで耳にしてきたのは、文化体験や、異なる言語・生活について理解を深めるなどポジティブな意味合いで世界を捉えるものや、地球規模での課題（貧困撲滅や環境保護など）について考えようというスローガンのものなどが多い印象だった。</p> <p>そこで、普段の暮らしの中にある実情を捉えることから「多文化共生」について理解を深める機会を、大学生に届けたいと考えた。</p> <p><b>【学生観】</b></p> <p>本プログラムを受講する学生たちは、ボランティアセンターにおいて「誰もが国際課題を自分ごとに 国際協力をもっと身近に」と掲げて活動する学生グループに所属している。国際課題に目を向けるきっかけづくりや、日常生活の中で取り組める身近な国際協力についての発信活動等に日頃より取り組んでいるが、これまでの活動において、日本国内における多文化共生に関するテーマが扱われたことはなく、意識が及んでいない様子が窺える。</p> <p><b>【教材観】</b></p> <p>オンライン（Zoom）による実践を行うにあたり、パワーポイント資料による教材を準備する。多文化共生に関する各種テーマをダイジェストで取り扱っていき（教師国内研修にて取り扱われた内容を簡単に提示）、学生の関心を広げ意欲を掻き立てることに重きを置く。</p>	

<p><b>【指導観】</b> 説明をしすぎない。ヒントを与える。学生たちの自主的な調べ学習や、今後のアクションへとつながる導入になるよう努める。(ボランティアセンターとして、教科指導ではなく、きっかけづくりであることに留意する。)</p> <p><b>【設定時に想定された学生の変容】</b> 身近な国際問題に目を向けるようになること。 自分たちにできるアクションを考えるようになること。</p>			
<b>【4】 展開計画 (全 1 時間)</b>			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	身近な国際問題に目を向ける。 自分たちにできるアクションを考える。	少人数のゼミ形式で質疑応答を行いながら各種テーマに関する理解を深める。	パワーポイント
<b>【5】 本時の展開</b>			
過程 時間	学習活動	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (20分)	<p>問い. 「多文化共生」と聞いて何を思い浮かべるか? (文章にして提出)</p> <p>… 「多文化共生」 語句説明</p> <p>短編映画「Born With It - 生まれつき」の導入1分を視聴し、感想を語り合う。</p> <p>… 「国籍」 語句説明</p> <p>… 「外国人児童の受け入れ」について解説</p>	<p>全体を通じて、学生が聞いているだけにならないよう適宜感想を求めるなど対話型になるよう留意する。</p>	<p>パワーポイント</p> <p>(YouTube 利用)</p>
展開 (20分)	<p>各種テーマを文字のみで示して言葉の認知について確認し、次に事例資料を見せて内容の解説を行う、という作業を順々に繰り返す。</p> <p>「在日朝鮮人問題」</p> <p>「民族学級」</p> <p>「アイヌ民族」</p> <p>「拉致問題」</p> <p>「難民問題」</p> <p>「技能実習生」</p>		<p>(事例資料はすべて教師国内研修で提供されたものを活用)</p>

<p><b>まとめ</b> (20分)</p>	<p>キーワードの整理</p> <p>…日本で暮らす外国人（ルーツを持つ人）</p> <p>…その人たちを支えるコミュニティ</p> <p>…異なる言語・文化の中で暮らす大変さ</p> <p>…言葉は道具のみならず文化でもある</p> <p>…アイデンティティと自己表現</p> <p>なぜこのプログラムを企画したのか、何を伝えたかったのかを説明。</p> <p>問い. 改めて「多文化共生」と聞いて何を思い浮かべるか？（文章にして提出）</p> <p>問い. これから意識したいこと、取り組みたいことがあるか？（文章にして提出）</p>	
-----------------------------	---	--

**【授業実践の様子】**



(オンラインにおける実践の様子)

**教えて!! V仮面の おすすめボランティア活動!**

多文化共生社会をめざして


**「子どもにほんご教室 ゆにぼ〜す」**

「外国にルーツを持つ子ども」って聞いたことあるかい？  
親の何方またはいずれか片方が外国出身者である子どものことをさして、特に来日する子どもは学校の授業内容を理解することが難しく、日本語話ができるようになっても学習に必要な日本語を身につけるためには周囲からのきめ細かな支援が大切だと書かれている。このような日本語のわからない子どもが全国の公立学校に50,000人以上在籍している\* がい。

立ち上げ当時から府大の学生が活動に協力してきた堺市の「ゆにぼ〜す」では、子どもたちに日本語や学校の勉強を教えているがい。また、家庭や学校との相談や入籍のための手続きなどの支援も行っていて、そういう時に**母語で支援することができる留学生**がいりすると大活躍なんだがい！

言葉の壁、日本独特の文化、みんなと同じでない見た目や名前であること、そういった「まわりになじむこと」に困難を抱えている子どもたちに、**安心できる居場所を届けたいことを社会全体で進められたいがい。**

※「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度）」/文部科学省より



(大学近辺でのボランティア活動の紹介)

**【6】 本時の振り返り**

一つ一つ採り上げて也十分に意見交換等を行えそうなテーマをダイジェストで取り扱い、スピーディーな展開となった。言い換えると、各種テーマについてまだまだ深められるのではないかという余韻を残すかたちで終わられたとも表現できる。集中力を切らせず駆け抜けることができた。

**【7】 単元を通した児童生徒の反応/変化**

プログラムにおいて様々なキーワードを提示したが、何となく聞いたことはあるがよくはわかっていないという反応が多かった。例えば在日朝鮮人について、大阪市内出身の学生は小中学校において学ぶ機会があったと答える者がいたが、大阪府外出身の学生の場合はほとんど耳にすることがなかったと答えていた。出身地によって、民族問題等を学ぶ環境が大きく変わるのであろうことが見て取れた。

以下の項目は受講した学生たちからのアンケート結果を記載。

**【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】**

以下、学生からの事後感想

- ・世界のことを知るよりも、まず日本について身の周りのことを知ろうとすることを意識したい。
- ・人々の生活に関わる福祉という観点が印象に残ったので、そういう意識で国際分野にも関わるものについて見ていけたらいいなと思いました。また、Born With It（うまれつき）という言葉が印象的で、国籍もふくめ、すべての人にうまれつきはつきものかなと思うので、その違いをどうやって認識して

いったり認識してもらえようようにしたりといったところを意識してみたいなと思いました。

- ・ 今日出てきたような、外国人に関わる言葉について調べて自分の中に落とし込んで、説明できるようになりたいな、と思いました。とりあえず理解したいな、と思いました。身近なところに在日の人に向けた活動をしている団体があることを知らなかったので、それについても自分が考えられることがあれば考えてみたいです。
- ・ 今日自分が話を聞いたように、もっと色んなことや人権問題などに興味を持って勉強したいです。また、周りの人に対しても伝えられたらなと思います。
- ・ 外国人といっても様々な背景で外国人になっていることを知れた。日本から見ると外国でも、ほかの国から見ると日本が外国になる。「バベルの学校」(※フランスの多文化学級を描いたドキュメンタリー映画)を見て、遠い国の話と思ってしまっていたが、日本でも同じような問題が起きていることを学んだ。私の中で、今までの活動は、遠い国のことを思ってしていた。これからはもっと身近な自分の住んでいる地域で困っている人についても活動していきたいと感じた。
- ・ 多様な文化的背景をもつ人たちが心地よく日本社会で生活するために、日本人への国際理解を進めることは出前授業などの例からイメージできたが、本人たちをエンパワメントしていくことはあまり思い描くことができなかった。“当事者”でなければ分からないことなのか...少なくとも知ろうと努力したいと思った。その輪に入り、一緒に活動したり、支えたりすることが可能であればやってみたいと思った。受け入れてもらえるのか多少不安である...

#### 【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

##### (授業前)「多文化共生のイメージ」

- ・ 在日外国人
- ・ 多国籍国家
- ・ 「人種のるつぼ」
- ・ 移民・外国人・国籍などの違いを認めること。
- ・ お互いの文化を尊重すること。
- ・ 様々な人種の人や宗教の人が一緒に暮らしている。
- ・ 肌の色がちがったり言葉が違ったりする人達と一緒に生きる。
- ・ いろんな国に住む異なる文化の中で暮らす人たちが、相手の文化を尊重しながら生きること。でも、日本の中でも家庭によって暮らし方は異なるから、各家庭を外から見た関係も多文化と呼べるのかもしれない。

##### (授業後)「多文化共生のイメージ」

- ・ 尊重・おもいやり・アイデンティティ
- ・ 自分以外の人について背景や文化を知ること。
- ・ お互いの違いを認めて、思いやりの心をもつこと。
- ・ (実例を知ることによって今までの印象よりもずっと) 身近なこと。
- ・ 様々なルーツを持つ人がいるということなので、身近にいる人に関心を向ける。様々な文化を知らないとしても理解するのは難しいと思うので、まず文化を知ることが大事。
- ・ 異なる国に住む文化や生活が自分とは全く違う人だけでなく、自分の周りに暮らしているけど違う文化を一つでも持つ人(外国人とひとまとまりにしていいのか、あまりまとまっていないです)とお互いを尊重しながら、わからないことや気になることなど助け合って生きていくこと。

## 【8】自己評価

1. 苦勞した点	実践内容の考案。教師国内研修における学びがすべて印象深かったため、学生たちにもなるべく広く追体験をしてもらいたいと考えた結果、多数の要点を短時間に詰め込んだ駆け足の内容となってしまった。学生たちの学びが中途半端（悪い意味で広く浅く）になってしまわぬよう丁寧な進行を心掛けた。
2. 改善点	時間設定に余裕がある場合は、一つ一つのテーマの掘り下げをもっと入念に行うことができる。また、進行にあたっては「授業者⇄受講者」の時間をとることはできたが、「受講者⇄受講者」の時間をとることが満足にできなかったため、今後は学生同士の語り合いの機会を盛り込んでいきたい。
3. 成果が出た点	意図していた「学生の関心を広げ意欲を掻き立てる」という点については、アンケート結果を読む限り、一定の成果を残せたように感じている。次の段階として、学生たちとさらに学びを深め、その成果を学生たちが地域（小中高校生等）にも伝え、そしてまた次の学生たちにも伝え…というサイクルを生み出すきっかけにしたい。
4. 備考（授業者による自由記述）	<p>教師国内研修に参加していた教員から教えてもらった「アイたちの学校」という朝鮮学校の歴史と現状を描いたドキュメンタリー映画の上映会を、授業プログラムの翌週に大学内にて開催予定にしており、学生たちの学びをさらに深めるための連携企画として位置付けている。</p> <p>このように、教師国内研修に参加した教員同士の情報交換から得られたものも多く、教育現場で腐心している先生方との出会い自体も非常に有意義だった。JICAをはじめとする運営の方々の手厚いサポートも含め、恵まれた環境に身を置くことができたからこそ実践にこぎつけることができたということを申し添えておきたい。</p>

## 参考資料：

- ・ JapanSocietyNYC. “Born With It – Japan Cuts 2016” .  
Youtube. <<https://www.youtube.com/watch?v=yzfI9pAJkqg>>. (参照日 2022 年 2 月 7 日)
- ・ 鈴木久仁子. 「園児のピアス風習でも駄目？」. 神戸新聞. 2019 年 10 月 7 日. 朝刊
- ・ 文部科学省. 「外国人の受入れ・共生に向けた文部科学省の取組概要について」 .  
<<https://www.moj.go.jp/isa/content/930004524.pdf>>. (参照日 2022 年 2 月 7 日)
- ・ 武田肇. 「ルーツ肯定的に 通名使わぬ小学校、100 年の歴史に幕」. 朝日新聞デジタル.  
<<https://www.asahi.com/articles/ASP3833ZWP33PTIL00X.html>>. (参照日 2022 年 2 月 7 日)
- ・ 有田佳代子・志賀玲子・渋谷実希（編著）新井久容・新城直樹・山本冴里（著）2018『多文化社会で多様性を考えるワークブック』研究社
- ・ 岩岡由季子・八木亜紀子（著）2019『基本アクティビティ集 2-難民』開発教育協会
- ・ 武田敬子. 「【最新版法務省統計】技能実習生の人数推移と現状。人数枠についても解説」. 外国人採用サポネット. <<https://global-saponet.mgl.mynavi.jp/visa/4272>>. (参照日 2022 年 2 月 7 日)
- ・ 宋光祐. 「若者の夢につけ込み金もうけ 理念ずたずた技能実習制度」. 朝日新聞デジタル.  
<<https://www.asahi.com/articles/ASP8T5JR4P8LUHB102S.html>>. (参照日 2022 年 2 月 7 日)
- ・ Projeto Construir ARTEL.  
<<http://www.projetoconstruirartel.org/index.html>>. (参照日 2022 年 2 月 7 日)